

1) 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2) 研究会基本情報

タイトル：「通言語的観点からみた音声類型論」（2021年度第2回研究会）

日時：2021年11月6日（土曜日）午後1時30分より午後5時30分

場所：オンライン

報告タイトル

13:30-14:15 Keita KURABE (ILCAA)

“Laryngeal contrasts in Jinghpaw”

14:15-15:00 Naoki UETA (ILCAA Joint Researcher, Hokuyo University)

“Aspiration in Khalkha Mongolian, Inner Mongolian, and Chinese”

15:15-16:00 Daisuke SHINAGAWA (ILCAA)

“Post-nasal trills in Bantu languages”

16:00-16:45 Seunghun J. Lee (ILCAA Joint Researcher, ICU)

“Phonetics of voicing in obstruents”

16:45-17:30 all participants

Discussion

上記日程で「通言語的観点からみた音声類型論」2021年度第2回（通算第2回）の研究会がオンラインで行われた。日本国の共同研究員の参加を中心するために、午後のセッションが行われた。各発表の要旨は以下のとおりである。

1. 13:30-14:15 Keita KURABE (ILCAA)

“Laryngeal contrasts in Jinghpaw”

ジンポー語（北ビルマ：シナ・チベット語族）は、有気・無気、喉頭化・非喉頭化など喉頭素性の対立を発達させた言語である。ジンポー語の様々な音韻現象は、喉頭素性の異化の観点から統一的に説明することが可能である。音素目録のギャップ、通時・共時的頭辞交替、レキシコンの類似性回避など一見独立したように見える現象は、[spread glottis] tier が関与する異化の一種として音韻的に解釈可能である。また、ジンポー語には有気音と緊喉母音の共起制限が観察されるが、この現象も [spread glottis] と [constricted glottis] が関与する喉頭素性の異化の一種として解釈することができる。

2. 14:15-15:00 Naoki UETA (ILCAA Joint Researcher, Hokuyo University)
“Aspiration in Khalkha Mongolian, Inner Mongolian, and Chinese”

ハルハモンゴル語、内モンゴル語、中国語は、いずれも閉鎖音に帯気性の対立を持つが、有気音の音声的特徴には違いがある。語頭においては、有気音の VOT の値が中国語、内モンゴル語、ハルハモンゴル語の順に大きい。一方、語中の有気音は、中国語では後気音 (postaspiration)、内モンゴル語とハルハモンゴル語では前気音 (preaspiration) として現れる。しかし、語中においても語頭の場合と同様に言語間で VOT に差があるかどうかは明らかでない。そこで本発表では、各言語の語中の有気音における VOT について検討した。音響分析の結果、VOT の値は語頭と同様に中国語、内モンゴル語、ハルハモンゴル語の順に大きい。内モンゴル語とハルハモンゴル語の差はわずかであることが明らかになった。また、ハルハモンゴル語では VOT のインフォーマント間でのばらつきが小さいのに対し、内モンゴル語と中国語では個人差が大きく、内モンゴル語では VOT が比較的長い話者がいることが確認された。その要因として、内モンゴル語話者の中に、第二言語である中国語の影響を受けて内モンゴル語の VOT も長くなっている話者がいる、という可能性が考えられる。

3. 15:15-16:00 Daisuke SHINAGAWA (ILCAA)
“Post-nasal trills in Bantu languages”

本発表では、バントゥ諸語研究においてこれまでほとんど報告されてこなかった、鼻音後位置におけるふるえ音 (post-nasal trilling) に関する現象について、そのバントゥ諸語内部の多様性を紹介し、一般音声学的な観点をもつ類型論的に整理した。バントゥ諸語の鼻音後位置における分節素現象としては、無声音の有声音化 (post-nasal voicing)、摩擦音の破擦音化 (post-nasal affrication)、口腔音の鼻音化 (post-nasal nasalization, cf. Ganda's/Meinhof's law) といったものが典型的な現象としてあげられる一方で、その位置でのふるえ音化に関しては、その存在すらほとんど知られてこなかった。本発表では、ロンボ語 (Rombo, Bantu E623) の鼻音後位置での有声閉鎖音のふるえ音への交替現象を皮切りに、バサア語 (Basaá, Bantu A43a) の音声的な両唇ふるえ音、ングニ系諸言語 (Bantu S40) のふるえ音挿入 ('ndrondroza', cf. Shkosana 2009, Bloom-Ström 2018) といったこれまでに断片的な報告がある現象に加え、ベルギー・ゲント大学との共同研究によって明らかになったコンゴ語諸変種

(Kikongo language cluster, Bantu H10) やサカタ語諸変種 (Sakata language cluster, Bantu C34) における鼻音後ふるえ音に関する新たな事実を紹介し、当該現象の通バントゥ諸語レベルでの多様性を提示した (これらについては、Heidi Goes 氏, Lorenzo Maselli 氏からのご教示に多くを負っている)。そのうえで、このような多様性は、i) 関与する調音器官: apical/labial, ii) post-nasal consonant の有声性, iii) 後続母音による制約の有無, といった類型論的なパラメータによって同定しうることを示した。さらには、この現象の歴史的発展過程についても短く言及した。とくに両唇ふるえ音に関しては、その歴史的発生プロセスとして、i) 鼻音後位置であることと、ii) 後続に high-back 母音が後続することが重要なトリガーになっているというのが一般的な理解である

(Ladefoged and Maddieson 1996)。これに対し、i) についてはバントゥ諸語にもその一般化が適用可能であるように見えるが、チベット・ビルマ語族ナガ系の Sangtam 語ではそれとは異なる歴史的プロセスが推定されることが報告されており (Coupe 2015)、通言語的な音声類型論の重要なテーマとなりうることを指摘した。一方 ii) については、例えばロンボ語などでは後続母音の制約からはかなり自由にふるえ音が実現していることから、通バントゥ諸語レベルの類型的研究によって、この一般化を更新する新たな実証的知見を提供することが期待される。

4. 16:00-16:45 Seunghun J. Lee (ILCAA Joint Researcher, ICU) “Phonetics of voicing in obstruents”

In this presentation, vot-based phonetic typology was investigated from 103 languages based on recordings available in the Illustrations of the IPA, a section in Journal of International Phonetic Association. Languages may have no voicing contrast, 2-way contrast, 3-way contrast, or 4-way contrast. Thirteen languages had no voicing contrast; most languages had voiceless consonants only, but one language had voiced consonants only. Majority of the languages investigated had a 2-way laryngeal contrast (n=64). The languages were divided into voiced-voiceless continuum or aspirated-unaspirated continuum. When a regression line is drawn by the vot contrast, a positive correlation was found; the longer the vot of a voiceless category is, the longer the vot of a voiced category is. Languages with a 3-way contrast demonstrated that voiceless unaspirated consonants have a narrow band of vot, while aspirated consonants and voiced consonants displayed a higher degree of variation. This correlation between vot and laryngeal categories was also found in languages with a 4-way contrast, though the voiced aspirated (or breathy) category could not reliably be categorized with vot only.